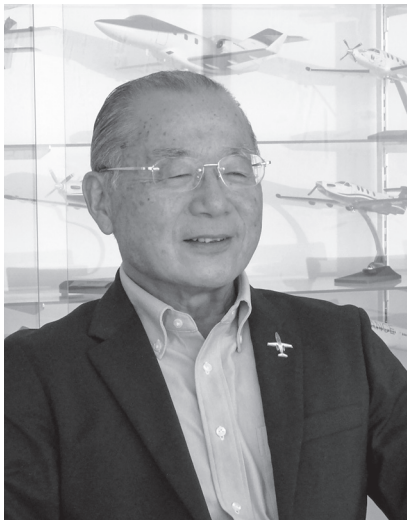


好奇心が扉を開く

株式会社ITCエアロリーシング 取締役会長



中山 智夫 氏

なかやま ともお
中山 智夫

聞き手
むらたけ いさお
室舘 勲
(株式会社潮流社
代表取締役社長)



英語への興味が人生を拓いた

——中山会長の、伊藤忠商事で世界最高売上を上げられたご活躍と、現在手掛けていらっしゃる航空機のリース事業による社会貢献のお話をお伺いしたいです。生い立ちからお伺いできますか。

中山 私は横浜で生まれ育ちました。横浜という、西洋文化が身近にある風土は、私の幼

少期において非常に大きな影響を与えてくれました。中学生のとき、ラジオですつと、米軍のキャンペーンから流れてくる「FEN (FBI East Network)」を聴いていました。アメリカ文化への憧れもあり、流れてくる英語を聴きながら、もっと英語を上達させたいと思ったものでした。少しずつ意味がわかりながらニュースを聴き、英単語は辞書を片っ端から覚えていき、英語はとにかくラジオで耳から学んでいきました。

ある時、いつものようにFENを聴いていると、臨時ニュースでケネディ大統領の銃撃事件の一報が流れました。慌ててテレビをつけますが、日本の放送局はどこもそのニュースを伝えていません。日本でその報道が流れたのは、それから約1時間後でした。私は英語がわかったために、日本で最も早いタイミ

ングで重要なニュースを知り得ることができたのです。この時に「この先、世界がグローバル化していく中で、世界の情報をいち早く取得できることは重要なのではないか。その意味でも、語学ができることが有用だ」と考えるようになりました。

——常に英語に触れる中で、語学的重要性を学んだ。

中山 もう一つ、私にとって大きな出会いは、中学生時代に所属していた英語部の先生です。先生の方針は、山下公園などに生徒たちを連れ出して、道行く外国人を見かけたら生徒に1人ずつ「よし中山、あの人に英語で話しかけて、挨拶と自己紹介をしてこい」といって背中を押します。この武者修行で非常に鍛えられました。おかげで、実践的な生きた英語を学ぶことができ、中学を卒業する頃には日

常会話程度は難なくできるようになっていました。この語学力は、後々私の身を助けてくれる、人生を切り開いてくれる武器になりました。

——実践的な語学を身につけられたことは財産ですね。

中山 明治大学に進学してからは英検一級を取得し、フランス語も学びました。「日米学生会議」に選抜され、アメリカの学生との深い交流の機会を得ます。そのときに、世界には様々な考え方や物の見方があるんだなと感じるとともに、環境や生い立ちの違う人に触れることで一層、日本という存在や日本人のアイデンティティを意識することになりました。大学三年生の終盤、就職活動が始まる時には、世界を股にかける仕事を希望して、総合商社を受験しました。一番初めに試験のあつ

と言われました。ファーストクラスで快適でしたが、残念ながらもまったく眠れなかったです（笑）。

——それは貴重な経験ですね。

中山 安宅会長は、ピアノもお好きで、とても芸術肌の方でした。安宅会長からは「中山さん。あなたの仕事はよくやるけど、仕事だけが人生ではない。何か自分の中に文化的な趣味を持ちなさい」とおっしゃっていました。会長は骨董品や美術品を集めていました。でも私は高価な物は買えませんから、その言葉はしばらく頭にこびりついていましたね。パリに勤務した際は、日本から重要なお客さんがいらした際には、必ず博物館や美術館の案内を担当するので、否応なく美術品に触れる機会も多かったわけです。

私はその中でも古代ローマのオイルランプ

た総合商社、安宅産業株式会社（現在の伊藤忠商事）から内定をいただき、入社しました。英語が得意だったこと、フランス語も学んでいたことなど、語学が得意だったことが高い評価をいただいたようです。

文化への好奇心

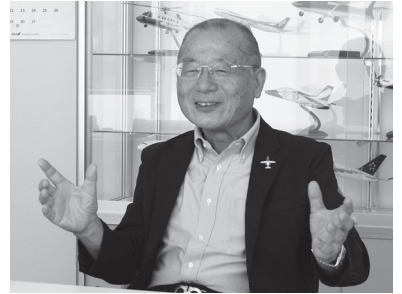
中山 入社後から、安宅英一会長にはとても良くしていただきました。パリ勤務のときには、安宅会長が美術品のコレクターだったので、パリのオークションに代理出席して落札もしました。

美術品を落札した後、秘書室から電話がかかってきましたね。「中山さん、ファーストクラスの切符を手配しましたから、美術品を持って日本に帰ってきてください。座ついているときは、必ず膝の上で抱えてくださいね」

に興味を持ちました。大金を積まなくても綺麗な物の一つ一つ集められるなと思ったからです。しかし骨董屋を回って最初に買ったのは、なんと偽物でした。目利きができないから最初は騙されてしまった。「このやろう」と思ってたね、絶対に目利きになってやろうと博物館通いが熱を帯びましたね。パリは、ヨーロッパやアフリカ、中近東の中心であり、いろいろな文化的な情報も集まる要所だったのでですね。

オイルランプへの興味が道を拓く

中山 オイルランプへの興味から、パリに駐在しながら、中近東・アフリカを回るわけです。特に関係が深くなったのは、元々フランスの植民地だったチュニジアです。縁あってチュニジアの4万7000トンのオイルタン



カー、45億円を受注しました。するとチュニジアの運輸大臣は「今回発注したオイルタンカーが地中海でエンジントラブルが発生したときに、中山がパリにいて「中山がパリに来てくれ」と言うわけです。

しかし、私のチュニジア行きは本社や日本大使館からは反対されました。当時、妻が一人目の子を身ごもっていたのです。日本かパリで産んでからにしないさい、と言われました。チュニジアの衛生レベルはそれだけ低かったのです。異動前に妻を連れてチュニジアを訪

れた際に、妻はクリニックめぐりをして、衛生レベルの高いスイス人医師のいる病院を自分で探してきましたよ。ここで産むと決めて帰ってきました、大した妻です。

—— 奥様の決断力もすごいですね。

中山 それで満を持して私のチュニジア行きが決まりました。パリでの生活を捨ててまでチュニジアに来た私に、運輸大臣は「これからのチュニジアの国家計画、優先的に情報を渡すよ」と言って、仕事のパートナーになってくれました。その背景には、日本が戦後、みるみる経済発展した様子を見て大統領らが日本に非常に興味を持っていたこと、他にも日本との経済関係を促進したいという意図もあったようです。歴史的にみても、日本はヨーロッパと比べ支配関係もなかったため、パートナーとして付き合いやすかったのだと思

います。

また、チュニジアは昔、ローマの属国でしたから、大昔のローマオイルランプがたくさん出るんですよ。チュニスから500キロほど南のベドウィンの集落にはたくさん遺跡があります。数多くオイルランプが出土する。ベドウィンたちと交渉して、オイルランプを譲ってもらおう。その内に「中山という、オイルランプを集めているやつがいる」と有名になって、たくさん集まるようになりました。

出土したオイルランプには、何千年も前の泥が付いていて、ブラシで丁寧に表面の泥を落とすと表面の装飾・レリーフが現れて、非常に興味深い。割れているものは除いて、キレイな一流品だけを買っていました。

—— オイルランプへの興味とチュニジアという風土がマッチしたんですね。

中山 それ以外にも、チュニジアとの縁は幼少期からありまして。私が小学校4年生の時、チュニジアがフランスから独立しました。それをNHKのこどもニュースが取り上げていることが妙に印象に残っていました。

「北アフリカのチュニジアは、小パリと呼ばれる美しい街のある国です。地中海に面する紺碧の海。家は白亜。家の白い壁と屋根や窓がブルーで統一された街並み。この都市が湧いています。フランスから独立したからです。昼夜を問わずお祭りをしています」というニュースを見て「へえ、いつか行ってみたいな」と思っていたんですよ。

—— 幼少期からの記憶が結びついた。不思議なご縁ですね。

中山 そんなご縁を感じつつ、チュニジアに赴任してからは農薬用トラクターからセメン

トプラントまで、多岐にわたって大きな仕事を手掛けることができました。赴任してから5年後には、日本とチュニジアの取引額の95%を伊藤忠商事が手掛けることになり、結果的に私は1人で500億円以上の案件を手掛け、伊藤忠商事の売上世界ナンバーワンになりました。

しかし会社と反りが合わない部分も出てきて、1980年、伊藤忠から独立する運びになりました。伊藤忠は3億円以下の仕事はしませんが、チュニジアには3億円以下の仕事もたくさんありましたので、伊藤忠の商圏を荒らさないでできる仕事はたくさんあると踏んでの独立です。さらに伊藤忠の副社長からは「中山にしかできない仕事もあるから、この先2年間は、案件は引き続き中山にやってもらいたい。毎月100万円払うからやっ

て中古なら1億円や8000万円くらいからできると思って、これをビジネスにしようと思えました。まずは自己資金でヘリコプターを2機買い、営業して回っていると、長期契約してくださる企業が見つかりました。こうして安定的収益を得て成功の兆しを見ると、さらにいろんな富裕層が参加してくれ、あっという間に70機にまで大きくなりました。なぜかという点、富裕層や企業にとって、優良な償却資産を持つことが重要なのです。新品のヘリコプターは償却に5年かかりますが、5年以上経った中古のヘリは、1年で100%減価償却が認められています。ほとんどリース先も決まっている資産ですから、購入しからすぐに利益を生みながら、減価償却もできるので、税の繰り延べにも有利で、富裕層に人気なのです。

くれ」と言われて、独立してからも2年間はお金の心配もなく仕事をさせてもらいました。有り難いことです。

チュニジア側にとっても、何百億円の仕事をやる上では適当な駐在員では困ると。実績があつて現地に精通しないとダメだということ、中山じゃなきゃダメだと言ってくれたのです。だから伊藤忠としても、中山に毎月100万円払ってでも引き続きやってもらったほうがいいという判断です。

航空機のリース事業と社会貢献

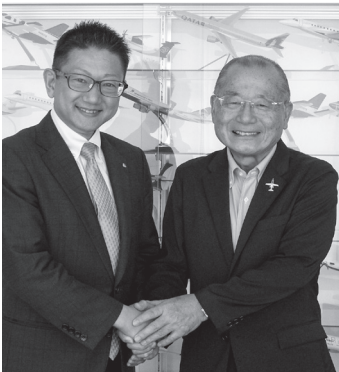
中山 1988年に、現地の会社を部下に託して、日本に戻ってまた新たな事業を始めました。航空機のリース事業です。周りからは大反対をされました。航空機リースは2〜300億円のお金が必要だと。でもヘリコプタ

投資家にとっては優良な投資案件ですが、管理する側はけっこう大変です。投資家さんの貴重なお金でヘリコプターに投資してもらって、どのような計画で保守・整備をするか。飛行計画、オーバーホールの資金をリザーブしておくこと、海外で運用されますからクロスボーダーの税務上の問題、法律の問題など様々な問題もあります。それを全部、商社時代からの知識と経験とノウハウを活かしながらおこなっているわけです。

——過去の経験が活かしているのですね。

中山 あまつたお金をタンス預金してもいいけども、やっぱり活かしたい。どうせ活かすなら社会的価値のある事業をやりたいと、皆思いますよね。

我々が所有している機体の大半は、ドクターヘリをはじめ、災害救助など、人命救助や



自然災害に役立っています。ただ売り上げを上げるだけではなく、社会貢献性が非常に高いのです。東日本大震災においても、福島原発事故の際、建屋の冷却水注入のプロジェクトで、日本で所有していないほどの超大型のポンプ車をロシアのアントノフで手配し、何とか冷却水の注入ができ二次災害を防ぐことが出来ました。

——日本の危機を救ってくださいと、ありがとうございます。現在はドローンが台頭してきていますか。

中山 将来的にはドローンなどの小型航空機分野は重要です。ただ現状では、特に小型ドローンで事故が多いので、保険会社がまだ認めていないようです。

将来、人員を6人くらい載せて運べるドローンなどが生まれた場合は、運用に耐えうる

す。若者たちが、ハイテク分野をはじめ自分の得意分野を見出して特化していくことが重要だと思います。そのために、もつともつと積極的なハングリー精神が必要です。あまりにも社会が安定しているためにハングリー精神が薄れています。

人口が減少する局面では外に活路を見出す必要もあります。そのためにも語学力を身につけて、海外経験をしてほしい。自分で何か

ができるという自信を持って、専門性を磨けば、ビジネスになる。自分しかできない何か

と思います。なぜなら、交通や物流が不便な僻地は世界中にあり、小型航空機が求められているからです。大手の航空会社でも採算が合わないので、取り組んでいないか補助金で運用している場所もあります。

ですから、ドローンが将来、住民の足として活用されることは重要です。こういった社会貢献性の高い分野には一生懸命取り組んで、世界で最先端に行く会社でありたいと思っています。1機で何百人も運べるような大規模旅客機というのは大手航空会社に任せて、我々は社会のために小型航空機を活かしていきたいと思っています。

——次世代の若者に向けて、一言お願いします。

中山 日本は文化、歴史、教育においてもと世界で存在感を出していけると思っています

を持つことです。

そのためには勉強が必要です。若者たちは仕事が終わってから何をやっているでしょうか。満足しては終わりです。満足しないで常に発展を心がけ、徹底的に学べば成功していきます。

——本日はありがとうございました。

■なかやま・ともお

1969年 明治大学政経学部卒業。大手総合商社、安宅産業株式会社に入社。(のちに伊藤忠商事に合併)

欧州、中近東、アフリカ諸国で、航空機、船舶など大型プロジェクトを数多く担当。チュニス事務所長を経て1982年にチュニジアで独立し、ITC創業。

1988年 本社を東京に移し、航空機・ヘリビジネスに特化。

著書に『魔法のランプの磨き方』(幻冬舎刊)等。

